OFFICIAL NEWS LETTER

J.LEAGUE NEWS

Vol. 150
31.Jul.2008

J.LEAGUE
編集・発行
社団法人 日本プロサッカーリーグ
ホームページ http://www.j-league.or.jp
スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想

理事会、総会、臨時理事会の終了後、記者会見で「イレブンミリオン」の実現など2期目への抱負を述べる鬼武チェアマン

鬼武健二チェアマンが再任

Jリーグ理事会、総会で理事および監事を選任

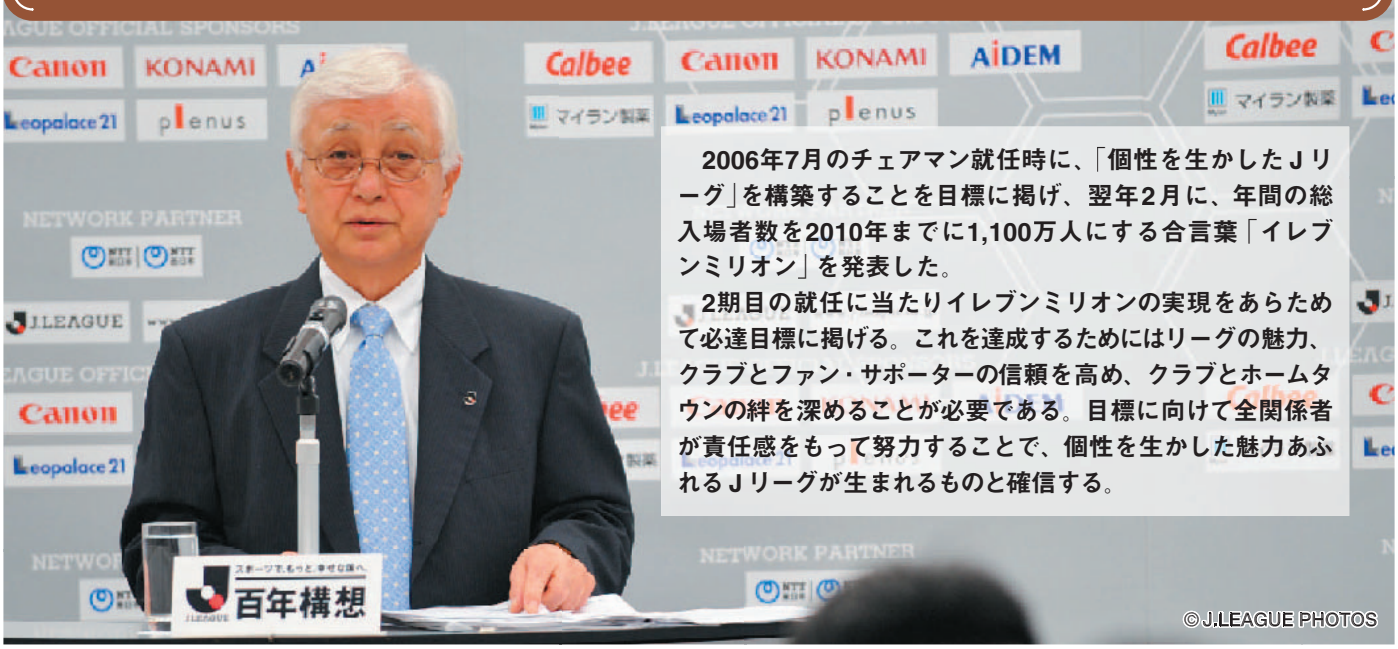
Jリーグは7月15日、平成20年度第4回理事会および第34回通常総会、臨時理事会を開催した。理事会、総会においては、鬼武健二がJリーグチェアマンとして選任され、2期目を務めることになった。また、理事および監事も選任され、Jリーグで選手としても活躍した風間八宏氏が新たに理事となった。任期はいずれも2年。財団法人 日本サッカー協会会長に就任した犬飼基昭が務めていた専務理事については、当面は空席となるが、鬼武チェアマンは「できるだけ早い時期に決めたいと考えている」と語った。(2〜3ページに関連記事)

J.LEAGUE OFFICIAL SPONSORS
Calbee Canon KONAMI AIDEM マイラン製薬 Leopalace21 plenus

NETWORK PARTNER: NTT東日本 NTT西日本
J.LEAGUE 100 YEAR VISION PARTNER: 朝日新聞
J.LEAGUE BROADCASTING PARTNER: SKY PerfecTV!
LEAGUE CUP SPONSOR: ヤマザキナビスコ
J.LEAGUE ALLSTAR SOCCER SPONSOR: JOMO
SUPER CUP SPONSOR: FUJI xerox
EQUIPMENT SUPPLIER: molten For the real game
J.LEAGUE OFFICIAL SUPPLIER: Johnson & Johnson

鬼武健二Jリーグチェアマン指針（2008～10年）

～イレブンミリオンの達成に向けて～



2006年7月のチェアマン就任時に、「個性を生かしたＪリーグ」を構築することを目標に掲げ、翌年2月に、年間の総入場者数を2010年までに1,100万人にする合言葉「イレブンミリオン」を発表した。

2期目の就任に当たりイレブンミリオンの実現をあらためて必達目標に掲げる。これを達成するためにはリーグの魅力、クラブとファン・サポーターの信頼を高め、クラブとホームタウンの絆を深めることが必要である。目標に向けて全関係者が責任感をもって努力することで、個性を生かした魅力あふれるＪリーグが生まれるものと確信する。

©J.LEAGUE PHOTOS

ファン、サポーターと共に実現する、イレブンミリオン

2007年は、859万510人と公式試合総入場者数の過去最高を記録した。今後3年間で28%の入場者数増を実現するために、Ｊリーグ・Ｊクラブの関係者全員は、ファン・サポーターをはじめとする地域の協力を得ながら、活動に注力する。09年から全クラブ連動型CRMシステムの導入を開始し、ファン・サポーターにきめ細かなサービスを提供できる環境を整える。

イレブンミリオン公式マーク

©J.LEAGUE PHOTOS

2008Ｊ1リーグ戦第16節、大分トリニータvs浦和レッズ（九州石油ドーム）

リーグ戦文化の浸透

将来、Ｊ2を22クラブまで拡大し、その後ＪＦＬ（日本フットボールリーグ）との入れ替えを開始する。これを受けてＪＦＬや地域リーグが活性化し、地域のサッカークラブが増えることを期待する。07年のＪリーグU-13創設を皮切りに、育成年代のリーグ戦をタウンクラブ・学校も参加できる形で拡充する。こうして日本のスポーツ界にリーグ戦文化を浸透させたい。その頂点にあたるＪリーグのすべての試合、すべてのプレーが輝くよう、関係者が全力を尽くす。そしてＡＦＣチャンピオンズリーグ（ＡＣＬ）を再び制覇してＦＩＦＡクラブワールドカップ（ＦＣＷＣ）に出場し、世界のトップクラブに挑む。

©J.LEAGUE PHOTOS

育成年代にもリーグ戦文化の浸透を目指す。2008Ｊリーグ U-14、ジェフユナイテッド千葉習志野vs横河武蔵野フットボールクラブジュニアユース

人づくり、夢づくり

クラブ経営人材の充実に向け、2008年にリニューアルしたGM講座を力強く継続する。育成年代の指導者の水準および地位向上のため、07年から本格化させた研修プログラムを一層充実させる。選手育成においても、07年から全クラブに拡大したＪリーグ・アカデミーの活動をさらに前進させ、子供たちに夢を与えたい。特に海外チームとの試合機会を多く設ける。また欧米のスタジアムのように、多機能化して収益性を高めた新スタジアム構想の具現化にまい進する。

©J.LEAGUE PHOTOS

2008Ｊリーグ GM講座

国際化

日本は欧州、南米のサッカー大国と比較して、国際経験の機会が著しく少ない。世界水準のサッカー実現のために、トップから育成年代までの、国際試合・国際交流の機会拡充を図る。特に日本サッカー協会と連携しながら、アジア各国との交流機会を増やし、アジアサッカーの水準向上をけん引する。

AFCチャンピオンズリーグ2008グループステージ、ガンバ大阪vsチョンブリFC（タイ）

地域と共に発展するJクラブ

Jクラブの経営安定・発展に向けて、経営諮問委員会による指導を強化する。2006年秋から始めたクラブ個別の経営情報開示を発展させつつ、経営の透明性を高める。クラブは自治体、財界、市民との絆を深め、経営基盤を強化する。そのために、クラブの個性を生かしたホームタウン活動を通じて、地域への貢献を深めていく。

ゴミゼロの日 大宮クリーン大作戦（大宮アルディージャ）

理事・監事 選任

後列左から、宮裕監事、眞壁潔監事、田中道博理事、田嶋幸三理事、武藤泰明理事、三屋裕子理事、傍士銑太理事、久保允誉理事、海野一幸理事。前列左から、村井満理事、風間八宏理事、中野幸夫理事、佐々木一樹常務理事、鬼武健二チェアマン、齋藤正治理事、大東和美理事、梅本徹理事

	理事・監事	氏　名		年齢	所　属
	チェアマン	鬼武　健二	（おにたけ　けんじ）	68	（社）日本プロサッカーリーグ
	常務理事	佐々木　一樹	（ささき　かずき）	56	（社）日本プロサッカーリーグ
	理　事	海野　一幸	（うみの　かずゆき）	62	（株）ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ　代表取締役社長
※	理　事	梅本　徹	（うめもと　とおる）	59	（株）京都パープルサンガ　代表取締役社長
※	理　事	大東　和美	（おおひがし　かずみ）	59	（株）鹿島アントラーズ・エフ・シー　代表取締役社長
	理　事	久保　允誉	（くぼ　まさたか）	58	（株）サンフレッチェ広島　取締役会長
※	理　事	齋藤　正治	（さいとう　まさはる）	58	横浜マリノス（株）　代表取締役社長
※	理　事	中野　幸夫	（なかの　ゆきお）	53	（株）アルビレックス新潟　代表取締役社長
※	理　事	風間　八宏	（かざま　やひろ）	46	（有）アハト風間・筑波大学サッカー部監督
	理　事	傍士　銑太	（ほうじ　せんた）	52	（財）日本経済研究所　上席研究主幹
	理　事	三屋　裕子	（みつや　ゆうこ）	49	（株）サイファ
※	理　事	村井　満	（むらい　みつる）	48	（株）リクルートエージェント　代表取締役
	理　事	武藤　泰明	（むとう　やすあき）	53	早稲田大学スポーツ科学学術院　教授
	理　事	田嶋　幸三	（たしま　こうぞう）	50	（財）日本サッカー協会　専務理事
※	理　事	田中　道博	（たなか　みちひろ）	50	（財）日本サッカー協会　理事
	理　事	松崎　康弘	（まつざき　やすひろ）	54	（財）日本サッカー協会　理事
※	監　事	眞壁　潔	（まかべ　きよし）	46	（株）湘南ベルマーレ　代表取締役
	監　事	宮　裕	（みや　ゆたか）	53	あずさ監査法人　代表社員公認会計士

※ 新任

■上記理事・監事の任期は、（社）日本プロサッカーリーグ定款第17条〔役員の任期は、就任後第2年目の決算期に関する総会終結のときまでとし、再任を妨げない〕に基づく

育成 「選手一貫教育 育成センター長研修会」を開催

効果的な仕事の進め方の基本を理解するために。内容は実践を重視

Ｊリーグは6月30日、7月1日の2日間にわたり、「選手一貫教育 育成センター長研修会」をＪＦＡハウスにおいて開催した。Ｊクラブの普及・育成をつかさどる育成センター長、リーダーコーチを対象とし、2009年1月まで5回にわたる研修を、11クラブずつ3グループに分かれて行う。

Ｊリーグ・アカデミーが目指す選手の一貫指導体制の充実においては、きちんとした指導方針、計画を持って育成を行うクラブの存在が不可欠。育成センターが置かれるＪクラブにあって、普及・育成の取り組みをリードする育成センター長、その補佐役としてのリーダーコーチに、効果的な仕事の進め方の基本を理解してもらうのが、この研修会の狙いだ。

第1日目は、株式会社リクルートマネジメントソリューションズの田中正春氏を講師に迎え、「依頼者を中心とした周囲の期待に応えながら、自分が実現したいことを、周囲を巻き込んで実現していくこと」という「仕事の定義」を確認後、「目標設定の考え方」、それに向けた「課題設定の考え方」についての重要性や手法を検討。第2日目は、前日の内容を踏まえ、育成センター長の仕事について考えた後、具体的な業務計画の立案も行った。

この計画は10年12月に実現したい状態を見据えた上での、08年12月までの短期プラン。今年6月に始まった「2008Ｊリーグ GM講座」と同様に、この研修会でも実践が重視されている。

実際の作業は4名ないし6名のグループに分かれて行われ、同一クラブの育成センター長とリーダーコーチがペア。課題について個人ワーク、ペアワーク、グループワークと進み、発表によって成果を参加者全員が共有した。考えたことを文字にする作業が多かったが、前述の田中氏は「書くためには考えなければならない。完成したものは掲示され、他人の目にも触れるため、しっかりしたものをつくろうと努力する」と、その効果を語った。

今年6月の「2008年度 第1回Ｊリーグ・アカデミー コーチングワークショップ」でも、確固たるクラブコンセプトに基礎を置いたチーバス（グアダラハラ・メキシコ）の育成の成果が紹介されたばかり。山下則之ＪリーグＨＲディベロップメントグループマネージャーは「今回学んだのは一つの手法。クラブによって方向性があると思う。地域の信頼を得ることができるような方針・計画づくりを行い、クラブ全体で共有しながら推進してほしい」と期待を込めた。

育成センター長としての仕事を再確認し、実際の業務に直結する作業を通して学ぶ

グループごとに話し合った成果を考え、文字にし、掲示する

「株式会社Ｊリーグメディアプロモーション」がスタート

Ｊリーグ映像株式会社は、2008年6月2日に社名を変更し、「株式会社Ｊリーグメディアプロモーション」として新たなスタートを切った。

1993年5月15日のＪリーグ開幕を1カ月後に控えて立ち上げられたのがＪリーグ映像株式会社。以来、すでに15年の月日がたち、サッカーやメディアを取り巻く環境も大きく変わった。スタッフ3名でスタートした開業当時は、Ｊリーグの映像販売業務に特化し、ビデオ化権（当時はVHS全盛、DVDはなかった）の販売や放送局への映像提供、海外放送権販売が業務の中心だった。

ＮＨＫ衛星放送は89年に始まり、Ｊリーグ発足当時はＪリーグの試合をキラーコンテンツ（当時はソフトと呼んでいた）にしてBSの拡販をしていた時代。CS放送のスカイパーフェクTV！も、まだＤＭＣ企画という企画会社からアナログ放送のパーフェクTV！を立ち上げていた時代。もちろん、インターネットもワンセグもなく、放送局のみが一般向けに映像を流せる時代だった。

放送環境も、BSデジタル化やCS放送の競争・合併により、スカパー！、民放BSデジタル放送もスタート。従来の放送が、多チャンネル・高画質の時代に突入し、地上波もデジタル化されて地デジも開始、携帯電話で放送が見られる「ワンセグ携帯」も販売されるなど、多様化の時代に入った。一方、通信環境もインフラが整備され、インターネットの普及により、映像を通信会社が配信することが可能になり、通信と放送の融合が叫ばれる時代となった。

こうした中、同社の映像販売事業は業務全体の20％程度の売り上げとなり、J's GOALを中心としたインターネット・モバイル事業、本年度から委託を受けた公式記録事業、記録を詳細にメタデータ化し映像と融合させたデジタルデータ事業、Ｊリーグフォト株式会社のデジタルフォト販売協力、ラジオ放送権販売など、従来の映像販売の枠を超えた業務が主流となったこともあり、今回の社名変更に至った。

今後は、放送、インターネット、モバイル、紙媒体、ラジオなど、さまざまなメディアと連携し、Ｊリーグや日本サッカー協会の露出をさらに拡大しプロモートしていくことによってファン・サポーターを増やし、イレブンミリオンの実現、サッカーの普及に結びつけるべく活動の幅を広げる。

育成 「Jユースカップ2008 第16回Jリーグユース選手権大会」が開幕

トップチームへの登竜門。予選リーグのホーム＆アウェイ制など貴重な経験

トップチームを目指す若い選手たちの登竜門ともいうべき「Jユースカップ2008　第16回Jリーグユース選手権大会」が7月13日、日立柏サッカー場で行われた予選リーグDグループ、柏レイソルU-18対川崎フロンターレU-18で開幕した。

31のJクラブの高校生年代のチームが7グループに分かれ、11月24日までホーム＆アウェイ制による予選リーグを実施。予選リーグを勝ち抜いた14チームに、日本クラブユースサッカー連盟代表の4チームを加え、合計18チームによって12月7日に決勝トーナメントがスタートする。決勝は同27日、大阪長居スタジアム。

現在、Jクラブのトップチームには、この大会で貴重な経験を積んだ選手も多い。今年もまた、選手たちのはつらつとした、ひたむきなプレーに注目したい。なお、昨年の大会はFC東京U-18が初優勝を飾っている。

開幕戦の柏U-18対川崎FU-18。若い選手たちのひたむきなプレーに期待

平成19年度収支決算

7月15日に開催した理事会・総会において、平成19年度（2007年度）のJリーグ収支決算が承認された。なお決算額は、一般会計と特別会計を合算した総括表で表示している。

平成19年度（2007年度）収支決算（総括表）　単位：百万円

科目	19年度実績(A)	19年度予算(B)	差額(A-B)
Ⅰ　事業活動収支の部			
1．事業活動収入			
①基本財産運用収入	0	0	0
②入会金収入	40	0	40
③会費収入	985	987	(*)▲1
④事業収入	11,317	11,014	303
協賛金収入	4,201	4,050	(*)152
Jリーグ主管試合入場料収入	209	286	(*)▲78
放送権料収入	5,278	5,262	16
商品化権料収入	680	537	(*)144
その他	949	880	69
事業活動収入計	12,342	12,001	(*)342
2．事業活動支出			
①事業費支出	10,226	9,929	297
リーグ運営経費	2,627	2,752	▲125
クラブへの配分金	7,196	6,824	(*)371
その他	403	353	50
②管理費支出	1,973	1,982	▲9
事業活動支出計	12,200	11,912	288
事業活動収支差額	143	89	54
Ⅱ　投資活動収支の部			
1．投資活動収入	179	30	149
2．投資活動支出	281	19	(*)263
投資活動収支差額	▲102	11	(*)▲114
Ⅲ　財務活動収支の部			
1．財務活動収入計	0	0	0
2．財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
Ⅳ　予備費支出	0	100	▲　100
当期収支差額	40	0	40
前期繰越収支差額	1,197	944	253
次期繰越収支差額	1,237	944	293

＊四捨五入により一部合計が合わないところがあります

参与選任

Jリーグは7月15日に開催した臨時理事会で、前理事の池田弘氏、佐野泉氏、椿原正浩氏、三ツ谷洋子氏および前監事の松岡和良氏の退任に伴い、5氏を参与に選任した。

参与

池田　弘：前 社団法人日本プロサッカーリーグ　理事
理　事　：1999年2月16日～2008年7月15日（在任期間9年5カ月）
実行委員（新潟）：1999年2月1日～2003年5月20日（在任期間4年4カ月）

佐野　泉：前 社団法人日本プロサッカーリーグ　理事
理　事：2006年7月20日～08年7月15日（在任期間2年）
実行委員（G大阪）：2002年7月23日～08年5月20日（在任期間5年10カ月）

椿原　正浩：前 社団法人日本プロサッカーリーグ　理事
理　事：2006年7月20日～08年7月15日（在任期間2年）
実行委員（FC東京）：2001年2月20日～08年2月19日（在任期間7年）

三ツ谷　洋子：前 社団法人日本プロサッカーリーグ　理事
理　事：1991年11月1日～2008年7月15日（在任期間16年9カ月）

松岡　和良：前 社団法人日本プロサッカーリーグ　監事
監　事：2006年7月20日～08年7月15日（在任期間2年）
実行委員（名古屋）：2005年5月17日～08年2月19日（在任期間2年9カ月）

第5回JCYインター・シティー・カップ（U-15）中日本大会 in HIDA、第4回西日本インターシティーカップサッカーフェスティバル（U-15）、第1回北日本JCYインターシティカップ（U-15）北日本を後援

Jリーグは昨年に引き続き、日本クラブユースサッカー連盟が主催する第5回JCYインター・シティー・カップ中日本を、また第4回西日本インターシティーカップサッカーフェスティバルを後援する。さらに本年度から第1回北日本JCYインター・シティカップの後援も同時に決定した。同大会は、日本クラブユースサッカー選手権大会に出場できなかったチームがモチベーション高く参加できる競技会として位置づけ、日本の将来を担うユース年代の少年たちのサッカー技術の向上、クラブチームの普及と発展を目的とし、開催するもの。

環境活動コンテスト「かんきょうみらいカップ2008」事業を後援

Jリーグは、環境未来カップ実行委員会（札幌市、北海道サッカー協会、北海道新聞社）が主催する、環境活動コンテスト「かんきょうみらいカップ2008」を後援する。同コンテストは、スポーツレクリエーションなどの活動を通じて子供たちに環境の大切さを知ってもらい環境に関する行動喚起を醸成することを目的とするもの。

9 柏レイソル

J2降格を機にクラブコンセプトを一新。支えてくれる人々を意識

サポーターと一体になる「勝利のダンス」 ©柏レイソル

サポーターは「家族」

すっかりおなじみになった光景だ。ホーム、アウェイ問わず試合に勝ったときに選手がプレゼントする「勝利のダンス」。7月6日のJ1リーグ戦第15節、ガンバ大阪を1−0で下し、チームは3位に浮上。スタンドのサポーターから選手にゲートフラッグが手渡され、応援歌の「レッツゴー柏」を大合唱しながらリズムに合わせ、みんなで踊る。「七夕ナイト」と銘打ったこの日、ホーム日立台（日立柏サッカー場）の夜空に選手と一体になったサポーターの大歓声が響き渡った。

サポーターは家族――。「強く、愛されるクラブ」づくりを基本コンセプトに掲げる柏レイソルは、愛情と敬意、感謝の気持ちを込めてサポーターをそう呼ぶ。

「クラブコンセプトは、2006年に現在のものに一新されました。それは、J2への降格がきっかけだったんです」と広報・ホームタウン部マネージャーの河原正明さんは打ち明けた。

河原 広報・ホームタウン部マネージャー

柏レイソルは、1999年にクラブ初タイトルとなるJリーグヤマザキナビスコカップ制覇、翌2000年も最終節まで優勝を争うなど、強豪クラブとして成長していた。ところが、その後は低迷し、05年にJ2へ降格してしまう。

このシーズン、日立台のスタンドには不穏な空気が流れていた。負けたときはもちろん、試合中もミスが出ると、失望したサポーターからは容赦ないやじや罵声が選手に浴びせられ、まるでアウェイで戦っているようだった。選手・クラブとサポーターの間に大きな溝ができてしまっていた。

「今思えば、成績がいいときはリーグ優勝ばかりにとらわれ、逆に低迷期は目先の勝利に四苦八苦といった状況で、クラブとして地域やサポーターとどう向かい合うべきか、という大切な部分が欠けていたのかもしれません」と河原さんは振り返る。

さまざまな触れ合いが生まれる柏市内の小学校訪問 ©柏レイソル

06年のJ2が開幕すると、新コンセプトに選手が呼応。第2節のアウェイの草津戦で勝利すると岡山一成選手（現 ベガルタ仙台）を中心にサポーターに初めて勝利のダンスを披露した。その後も勝つたびに踊り続け、選手とサポーターとの距離も徐々に縮まってきた。

そして、ホームでの第47節、スタンドに「一心同体」のメッセージボードが自主的に掲げられた。1年をかけて実践してきた新たなコンセプトが受け入れられたのを知った瞬間だ。奮起した選手たちは最終節に勝利し、1年でJ1に復帰。信頼関係を取り戻した。

存在価値を高めるために

まちづくり、ホームタウンの活性化にも乗り出した。06年から始まった「れいそるしま専科」。柏市を中心とした小学校への訪問活動だ。普及部チーフの池田仁守さんは「サッカーのチームプレーを通じて、人との協力や思いやりを知ってほしい」と話す。

池田 普及部チーフ

活動はまず、市教育委員会の校長会を通じて案内状を出し、申し込みがあると河原さんら、クラブの関係者が学校へ打ち合わせに行く。例えば小学5、6年生を対象に、4時限目にサッカー、給食を挟んで5時限目に選手の体験談などが語られる。参加人数は学校の規模にもよるが、100人程度で普及部のコーチが4人で教える。

「言葉づかいや態度、身なり、子供の目線に合わせるように気をつけています」と池田さん。内容は、例えば10人一組で並んで、ボールをそれぞれ胸と背中で押さえつけ、ボールを落とさないようにムカデのように歩いたりするレースなど。サッカーの技術を教えることを目的にはしていない。どうやったら協力してうまくできるかを考えさせ、生徒同士のコミュニケーション能力を高めることに重点を置いている。

給食も一緒に食べさせてもらい、サッカー以外の話もすれば、昼休みも一緒に遊ぶ。「ボール1個あれば、男女を問わず気軽にできる。そして、それをきっかけにさまざまな触れ合いが生まれる」とサッカーの素晴らしさを池田さんは語った。

この活動は、06年が3校、07年が5校、08年は学校行事との兼ね合いもあり、2学期までない。しかし、一度訪問した学校から、逆に招待され「感謝の会」を開いてくれたりもした。河原さんは「まずは柏市内全校に行き渡らせ足場を固めたい」とする。

「プロである以上、チームは勝たなければならない。それは当然のことです。しかし、その前に自分たちは誰に支えられているのかを意識しなければならない。それはホームタウンのすべての人たちなんです。わたしたちは皆さんに受け入れてもらえるように、さらに存在価値を高めていきたい」。河原さんと池田さんは力強く言い切った。柏レイソルの「百年構想」は、まだ始まったばかりだ。

（千葉日報社　鎌田 亮一）

誰もが、いつでも、興味やレベルに応じて好きなスポーツを楽しむことができる環境を整えることによって、人々が心身ともに健康で、豊かな社会をつくり上げることを目指す「Ｊリーグ百年構想」。この活動に取り組む最前線ともいえるのが、全国に33あるＪクラブだ。各クラブがそれぞれの地域性、歴史、実情などに応じて展開する多彩なプログラムにスポットを当てるシリーズの5回目は、柏レイソル、アビスパ福岡の取り組みを紹介する。

スポーツで、もっと、幸せな国へ。
J.LEAGUE 百年構想

10 アビスパ福岡

地域の広い受け皿と環境整備。今後10年への土台は整った

Ｊ唯一の「音サッカー」支援

アイマスクをした選手が次々に「ノールック」パスやダイレクトシュートを決める。ボールに入った鈴の音と、コート外からの声の指示を頼りにプレーする「音サッカー」。ルールは5人制のフットサルとほぼ同じ。パラリンピックの正式種目にもなっている。ゴールキーパー以外の4人は視覚障害者で、弱視や全盲など、不公平が生じないようにアイマスクで視界を完全に遮っている。選手同士の激しいぶつかり合いや、転倒する場面もある。

Ｊリーグで唯一、この音サッカーを支援しているのがアビスパ福岡だ。全国大会にも出場する福岡県筑紫野市の「ラッキーストライカーズ福岡」では、2004年の発足当時からアビスパ福岡のコーチが技術指導している。現在は週1回、コーチや監督を派遣する。

現在、ラッキーストライカーズ福岡の監督を務める下田功ホームタウン推進部長は、視覚障害者の「お客さんを呼べるくらいの迫力あふれるプレー」に終始圧倒されているという。「相手選手をかわしたり、ボレーを決めたり。彼らを見ていると、運動能力に動体視力なんて関係ないと思ってしまう。スポーツの持つ新しい可能性を感じますね」と普及と技術の向上にやりがいを感じている。メディアに取り上げられる機会も多く、アビスパ福岡のPRにも一役買っている。

下田 ホームタウン推進部長

クラブが行う社会貢献活動は介護予防事業、タグラグビーやドッジボール大会の開催など多岐にわたる。地域の人々に愛され、信頼されるクラブづくりを目指すため、そしてスポーツ人口全体の拡大のために、サッカーとは直接関係ないイベントでも積極的に企画、運営している。

活動の核となるサッカーでは、4歳から中学生までを対象としたスクールの会員数が08年3月で1,000人を超えた。03年に最初のスクールが開校し、その後県内6カ所に増設。右肩上がりに会員数を増やしてきた。

白熱したプレーを披露する音サッカーの選手たち　©アビスパ福岡

スクールでは、まず褒めてサッカーが楽しいと思わせること、「スポーツ＝遊び」という概念を浸透させることを念頭に置いている。遊びだからこそ真剣勝負が楽しい。例えば、鬼ごっこでもままごとでも、より面白く、刺激的にするために、子供たちは独自のルールを考え出す。スポーツも同じで、真剣に楽しむ遊びだという考えに基づいて指導している。

「子供は小さな大人じゃない」とスクールのコーチ陣を束ねる下田部長は力説する。8歳までの子供は、何かをしながら周りのことを吸収していく「ながら集中」だという。そういった子供独特の特徴を理解することなくしては、適切な指導はできないという。

子供の成長段階に合わせた指導の重要性を、地域のスポーツチーム指導者にも理解してもらおうと、養成事業にも力を入れる。07年に福岡県内で行った指導者向け講習会は46回。受講者数は849人にのぼる。

新たな育成目標を設定

着実な広がりを見せている草の根活動。これも九州で一番早くＪリーグに参入したクラブならではの、高い知名度によるところが大きい。だがそのブランド力も、07年に2度目のＪ2リーグ戦降格をして以来、陰りを見せている。かつてＪ1リーグ戦でプレーしたアビスパ福岡を見慣れたファンには、今の姿は物足りない。再び市民の誇りとなるようなチームになるためには、トップチームのさらなる強化が求められる。

そこでクラブは、アビスパ福岡の顔であるトップチームの魅力向上につなげようと、今年新たに育成目標を設定した。10年後、ベンチ入りメンバーの3分の1は自前で育てた選手で構成すること、さらに各世代日本代表選手を送り出すことで地域の要望を満たし、スタジアムの入場者増につなげようとしている。

目標達成への手段として、各世代の監督、コーチ全員が集まる週1～2回のミーティングで意思の統一を図る。こまめな情報交換で、世代を超えた選手交流も活発化している。抜きんでた選手を一つ上のカテゴリーに入れ、より高い才能を引き出す。同時に、空いたポジションに新たに入った選手が成長する。このサイクルを維持し、トップチームでも移籍で抜けた穴をすぐに育成から埋められる形をつくろうとしている。

高い人間性を持ったプロ選手を育てるための教育も育成段階から取り入れている。これまでやってきた野外活動やメンタルトレーニングに加え、潤滑な意思疎通を図るためのコミュニケーション講座も開く予定だ。

1996年のＪリーグ入会から13年目を迎え、地域に開かれた幅広い受け皿と、育成の環境整備は整った。これからの10年は、その土台をどう活用していくか、また、それがファンの拡大、入場者数アップに結びつけられるかどうかが課題になってくるだろう。

（西日本新聞社　丹村 智子）

大人も子供も一緒に楽しめる親子サッカー教室　©アビスパ福岡